

鷺と農夫

ある日、農夫が町はずれの自分の畑に急いでいると罌にかかった大きな鷺を見つけました。農夫はさっそく鷺を買からはずし逃がしてやりました。鷺は自由になった喜びに大きくはばたき高い空に帰っていきました。

それからしばらくして畑仕事に疲れた農夫は休憩しました。彼の後ろには崩れかけた土堀があったのです。突然、先ほどの鷺が舞いおりて農夫の帽子を掴み飛び去りました。

農夫は慌てて帽子を取り返そうと鷺を追いかけて走り出しました。その直後、大きな音とともに土堀が崩れ落ちました。

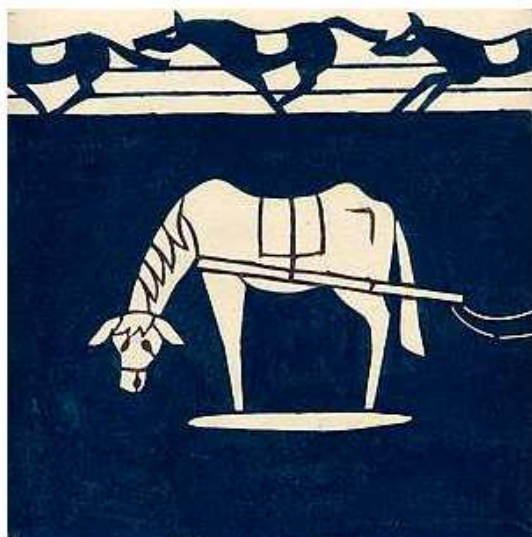


馬の老後

年老いた馬が挽き白をまわすために売られてきました。老いた馬にはつらい小屋で挽き白を回すつらい毎日がつづきました。

「あの興奮と歓喜の競馬場はどこへいったのだろう」
「渦巻く歓声の中で駆け抜けるあの快感は何だったのだろう」

大きな嘆息とともに走りつづけたあげく予期しない終着点に着いたことを嘆いている毎日でした。



「肖像画」

ある男が自分の肖像画を残しておこうと考え、画家をたずねた。この男は紙や墨などの画材費と画料もこめて僅か三分しか出さなかった。

後日、絵が出来上がってきた。見ると粗末な紙に水墨で後ろ向きの姿が描かれていた。男はかっとなって叫んだ。

「肖像画というのは、顔が大切なんだ、なんで後ろ向きに描いたんだ」

画家、いわく「あなたは、面子などというものは持っておられませんから」

